

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷十二第

行發日一月二年四十正大

論叢

相續税の能力原則上の弱點……………法學博士 神戸 正雄

社會學と現象學……………文學博士 米田 庄太郎

倫理と經濟との關係……………法學博士 財部 靜治

時論

支那の社會の固定性……………文學博士 矢野 仁一

小作問題と朝鮮の小作制……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

貨幣の對内及び對外價値の變動と貿易並ひに爲替との關係を論ず……………經濟學士 谷口 吉彦

雜錄

再び西陣の機業仲間について……………經濟學博士 本庄榮治郎

海運同盟の研究に關する……………法學士 小島昌太郎
參考資料に就いて……………

倫理と經濟との關係 (二)

財 部 靜 治

目 次

五 生存の經濟的基本と倫理

五

以上説く所によりて考ふるに、國民經濟に於ける道德的要素の承認は、特に國民經濟に關する國家及社會の、合理的處置を尋ね、又前世紀に於ける諸改良諸變遷の歴史を究め、現時社會改良運動の叙説に當ることにより、最も鮮明に之を窺ひ得べきことを想はしむと雖も、その外一般に經濟生活の如何なる部面につきて見るも、倫理的評價を挿むの餘地なきはなし、此點に就き吾人は恩師田島博士の好著「經濟と道德」を想起し、諸方面の評論が同著により、系統的に加へられ、その題材の取扱上特色に富むことを、特記するの値ありと確信し、吾人の如き若輩が此大問題に筆を染むるが如き、徒らに蛇足を添ゆるに過ぎざるべしと想ふ者なりと雖も、經濟及道德の交渉を例證するの趣旨により、以下少しく説く所あらんとす、その間必ずしも順序の整頓を期せず、

讀者之を諒せよ。

倫理は各個人の道德的開化生活が、何に存すべきかを示す、而して各個人がかゝる生活を送り得べきか、又如何なる程度に於て然るかは、元來經濟事情により左右さるゝを以て、あらゆる開化國民の社會及國家はその職分として、國民を組成せる各人及諸階級が、自力により又賢明なる行動により、かゝる高尚なる一生活を送り得べき、可能性を宿せる一國民經濟組織を、備はらしむるに心掛くべし、かくて諸國民は此義務を引受け、その立法及行政上、又その學問及實地に於ける社會運動上、此職分を盡すに努む。

右の如く觀するにより、道德の問題は經濟學の眞根蒂に横はることを察すべし、かくて現に Roscher の如きは、經濟學の基本概念たる富又は貨幣を定義するに當りてさへも、その概念が同時に倫理的並に心理的研究の物體たるべきことを、含意せしむるが如き仕方により、貨物とは人の「眞」欲望を、直接間接に充たすの用に供し得べしと、承認せらるゝ事々物々を指すとせり、貨物概念決定の目的上、右の如く眞の欲望又は正當の欲望と、制限するの要あるやは別問なるも、經濟が倫理により支配さるとなす限り、眞の富は人の性質に相應はしく、人の道理により承認されたる一欲望、略言すれば合理的欲望を、充たすべき事々物々より組成さると、考ふるも不當に非ず、而して何が合理的欲望たるかを、決する者は何なるかを考ふるに、第一に身體の實際必

需何たるかを決するは、生理衛生のことたるも、如何なる限界内に於て、是等の欲望に満足を與ふること、正しきやを指定するは道德のことたり、夫れ人は元來貨物を欲し、效用を追随すべき者なりとして、之を取扱ふべき經濟學は、人の性質を論じ、自から又その中に道德の理論を宿すべき、宗教倫理又は哲學に對して従たり、宗教又は哲學にありては、人の性質及使命たるかを論ず、而して個人及社會がその時及財産を、何の用途に費やすべきかは、人の使命につきて懷くべき、觀念如何により左右さる。人につき肉體從ひて物欲以外に何物をも見ず、生命は太虛の中より盜み得たる、一刹那の一生存に外ならずとする學説は、究極する所社會を享樂の絶對的追隨に陥るべし、之が最古人生觀の一つは、虞らくは之を舊約聖書傳道之書に求むべし、「夫智慧多ければ憤激多し、知識を増す者は憂患を増す」(二章一八)との結論に達し、「我神の諸の作爲を見しか、人は日の下におこなはるゝところの事を究むるあたはざるなり、人これを究めんと勞するも、これを究むることを得ず、且又智者ありてこれを知と思ふも、これを究むることあたはざるなり」(八章一七)と言へる后、Solomon は人生の規則を次の如く説き出せり、「汝往て喜悅をもて汝のばんを食ひ、樂き心をもて汝の酒を飲め、其は神久く汝の所爲を嘉納たまへばなり、汝の衣服を常に白からしめよ、汝の頭に膏を絶しむるなかれ、日の下に汝が賜はるこの汝の空なる生命の日の間、汝その愛する妻とともに、喜びて度生せ、汝の空なる生命の間しかせよ、是は汝

が世にありて受る分、汝が日の下に働ける勞苦によりて得る者なり、凡て汝の手に堪ることば、力をつくしてこれを爲せ、其は汝の往んとするところの陰府には、工作も計謀も知識も智慧もあることなければなり」(九章七一〇)とせり、Solomonの智慧によるに、人は人生の目的如何の問題を、解決し得ざるが故に、出来るだけ多くこの生命を、享樂すべしとするにありき。かゝる觀想とは反對に肉體を以て、罪の一根源に過ぎずとし、生命を以て試鍊に過ぎずとする禁欲主義、隱遁主義は、最も基本的なる諸欲の、満足を抑制せんことを望み、かくて或はシリアのSimon Stylitesをして、柱の頂上に留まり住み、苦行することを以てその信徒扱ひせしめ、或は古印度に於けるが如く、涅槃への大願により寂滅せしめんとするは、前記極端なる享樂主義と共に、現今普通なる道德律の非難する所なり。右は經濟上に影響すべき、兩極端の人生觀を例示せるものなるが、その中間に於ても亦學者により懐かるゝ道德觀如何により、經濟學說上潤色せらるゝ所あるべきや誣ふべからず、現に道德輕視 a low morality の非難が、古典經濟學派の諸學者に加へらるゝことゝなりしも、部分的には夫等經濟學者が、その當時に通用せる道德學說を、採用せるの事實に基づけり、即ちその道德學說は世に快樂主義 Hedonism として傳へらるゝもの、諸形態たりき、夫れ Locke 及その諸后繼者は、精神は有情物以上に出でざることを、示せりと推測せられたるが、假りに然りとせば善は快樂を意味するの外なく、惡は苦痛を意味するの

外なかるべし、かくて行動の合理的目的は、最小量の苦痛により、最大量の快樂を收むるに存すとす。この外なかるべし、而してこの道德學説は、私利的たるを博愛的たるとの、主要なる二形態に分れ、その私利的なるものによるに、個人は自己の幸福のみを圖り得べしとし、その博愛的又は功利的なるものによれば、萬人の幸福を圖り得べく、又圖るべきものなりとせり、右二學説を繋ぐの聯鎖は、社會的本能により授けらるべく、即ちその本能を充たすにより、人は自己の幸福とその同胞の幸福とを、同時に全うすべしとなすを得ん、そは兎も角右功利主義の學説は、Humeにより初めてその梗概を示され、後に Bentham により精説されし所なるが、そは古典經濟學派の諸學者により採用せられ、かくて又后世の學者により、彼等は人の性質に關する低級觀念を借りて、諸社會現象を説明せりとの譏りを、招くの事由となれり。^{*} 現今普通なる人生觀によるに、人はその諸能力全部を、充分に延ばすことを努むべしと教ゆ、就中智能生活は最も肝要なるを以て、第一に智徳の啓發を圖り、併せて又身體の暢達を計るべきなり、そは精神を宿すの器なるを以てなり、この目的は冷ねく知られたる古羅馬の諷詩作者 Decimus Junius Juvenal による一格言「健全なる精神は、健康なる身體に宿る」Orandum est ut sit mens sana in corpore sano とするものにより言ひ表はさる、過勞又は過度の制欲により身體を苦しめ、かくてその身體をして、最早心の器物たり得ざるが如くなさしむるは正しからず、されど又之を懦弱又無氣力ならしめ、

* Cf. Montague, Art. 'Systems of Morality in Relation to Political Economy' in Palgrave's Dictionary. II. p. 614.

かくて日夜空想に驅らるゝが如くなさしむるも正しからず、此點につき古希臘人を模範として擧げ得べきは、普ねく人の知れる所なり、彼等は身體につき大に心配せり、而も克く積極的に身體を強健にし又勇壯ならしめ、依りて疲勞を覺わず、風雨に耐へ、又殆んど疾病に罹ることなからしめんことのみ腐心せり、同時に彼等は哲學及政治を論じて、心の啓發を圖り、又教育の一方便と考へられたる、藝術に興を催ふしたり。要するに經濟學はその特殊研究目的上、人を以て效用を追隨すとするも、有形の富は一手段にして、一目的たらざるを忘るべきに非ず、之と共に身體を犠牲に供すべき、禁欲主義に耳を傾くべきに非ず、又事々物々を肉體の要求のため、犠牲に供すべき逸樂主義 Sybaritism (Sybaris は紀元前七百餘年に、南伊太利に立てられたる希臘の富裕なる大商賈町なり、その住民は贅澤好き及優柔なる生活により、極めて著名となれるより、Sybarite てふ語は、逸樂と同義となれり) にも耳を貸すべきに非ず、人の行爲の諸動機何たるべきかを、人の性質を取扱ふべき諸學問につきて學び、依りて社會の秩序を整へ、その結果各人を促し、その時及力を絶わす最善の用途に、使用せしむるの状あるべきなり。^{*}

右の論旨よりせんか、幸福の主要元素が、富裕のみに限らざること、等しく明白なり、富は幸福の外界設備を、備はらしめ得べき物質に外ならず、或程度の進歩には、どの途富あること肝要なるも、富裕なるを以て進歩の主要證據とするを得ず、寧ろ古人は富の増殖により、優柔及滅

* Cf. Laveleye, op. cit., pp. 6, 7; the same author, *Luxury*, pp. 134, 135.

亡を促すべきことの、避け難きを信じ、Montesquieu さへも亦かく信じたり、こは彼等が諸帝國の没落を、説明せる仕方なり、素より一民族が原始的質朴の狀況を脱し、急劇に富裕となるも、之と同時に必要なる道德力を養ひ、由りてその富を良好に使用するの、能力を練るに非ずんば、その富は不道德の源泉となり、その没落の原因となるべきは眞なり、實に諸民主國は富の過大によるよりも、常に過度の不平等及富者の奢侈により没落したり、政權を握りつゝ、驕る者は、久しからざるの事例たる、東西史上その例に乏しからざるなり、^{*}凡て嚴正に一身專屬的なる幸福、詳言すれば健康、壽命、智慧及徳を増すがために、富が良好に費やさるる迄は、何人もその富の用途に付、完全なるを得たりとするを得ず、否一步を進め富を以て、脩道の障りとするの思想さへも、東西洋を通じ曾て唱へられたることあり、基督教の教旨中には、富者にして天國に入るは、駱駝をして針の孔を通せしむるより難しとするものあると同様、我邦の古道德訓中には、人最可行施、布施菩提糧、人最不惜財、財寶菩提障(童子教)と謂へるあり、そは兎も角社會として富裕なりとするも、その組成員全部が一層高尚なる幸福、高尚なる開化を尊重し、金儲けを以て此開化を擧ぐるの一方便視するに至る迄は、その社會は眞の幸福に達したりとするを得ず、此主意よりせんか、農村社會は大に富めることなしとするも、その幸福を加ふるの幾多方法として、費用を要せざるものを、包容するの長所を收め得べし、農家に於ける自然の外圍は、子供をして富よ

* Cf. Laveleye, *Luxury*, pp. 143, 144.

りも貴き、能力及勇氣を暢達せしむ、普通の貯蓄上后日の物質的安樂を、謀るがために啓發せらるべき、儉約心の同一原則は、多年に亘り自然の賜及自然の教訓を、賢明に享け入るゝがために、齎らざるべき一層偉大なる幸福につきても、等しく應用せらる、此點に藏蓄せる所多き農民は、「吾に貧をも富をも與へざれ」との希望を述べし、一賢者の理想状態に、萬人中最も近く達し得たりとすべし、彼は世界により授けられたる良境遇に處し、その家族の衣食住を、氣樂にせしむることに不足せず、健康なる身體と剛健なる氣質とを、養成されたる子には、教育の好機會を授け得べく、自己としては之に勉むるの意ある限り、その自然の餘暇を利用し、新聞雜誌及書籍を用ゐ、自己の啓發を圖るを得べし、同様の諸能力を有する隣人との諸關係は、その他如何なる事情の下に發見さるゝよりも、遙かに人間らしく、又眞實なり、農民にしてかく生活するの要ある如く、生活したりとせんか、その家庭は眞實なる親切、人の諸權利への眞實なる同情を、見るべき中心とならん、又和順を培ふの心掛、不斷に少しく存せんか、子供同様に又その兩親に、男たり又女たる性格の、眞基本を授くるに最も近からん、かくてよく治められたる農家は、子孫に至る迄連綿安泰なるを得べし、略言すれば賢明に使用されたる小資産は、莫大の幸福を意味す

A little wealth well used means enormous welfare とは、農家につきて謂ひ得べき所なり、吾人はかく觀すると共に特に想起せらるゝは、天保九（一八三八）年七十七歳にて歿せし江戸の小説家高井蘭

* Cf. Ges. T. Fairchild, Rural Wealth and Welfare, 1900. p. 373 fig.

山が、文化六年乃至文政五年の十三ヶ年に亘り（一八〇九—一八三三年）當時の社會狀態を描寫せるものとして、侮り難き價值を有すと思はるゝ三冊本の著書、「農家調寶記」中に挿みし序文なり、即ち曰く

抑農間に生るゝ者、四民の次士に亞る事を知（り）、其身の業を專にし、晝夜怠なく先祖を大切にし、父母に能（く）事（へ）、他を敬ひ己を謙（り）、侈を省（き）、家内より使令者迄憐（れ）の心を用（ゐ）、公の御法度は申に及ばず、領主地頭の掟を守（り）、代官を崇（め）、常に慎んで惡事をすまじと心懸んには、天道神明の愍を蒙（り）、子々孫々繁榮疑有べからず、斯意を用ゐんには、農家の上を超て、氣樂なるものはあらじ、花鳥風月の景物も、都會に（勝り）、眼を山水に樂（ま）しめ、心を曠野の廣（き）におく、壽も又何ぞ久しからざらむ

と、現今の時勢に處し、その主張を以て悉く適切なりとはなし得ざるべきも、農村生活の幸福を謳歌せる點に於て、前記の觀想と共通せるものあるが如きは、注意すべきに非ずや、尤も實際にありては、農村の氣風因循に流れて、進歩に逆行することあると共に、文明の世にありては、農民市民化に伴ふ諸弊害を生じ、前記の如き長所を發揮し得ざることあるべし。

以上説き來れる所を綜合して考ふるに、特に現時の如く普通の知識か、萬民に行渡れる時代にありては、萬民の生存上一定の物質的基礎備はることを條件として、その社會は幸福狀態にあり

と想像し得べく、國家社會としては、畢竟此基礎を整ふるに勉むべきのみ、素より國民の生業視すべきもの、殆んど農業に限られたる時代に於て、領主より土地を借りて耕作せる農民が慣習によりて定まれる產物納付及徭役の義務を果す限り、殆んど世襲的にその土地を占有し得たる當時にありては、兵亂及暴徒の虞なき限り、住民は克く寡欲知足たり、その堵に安んずることを得たりしならんも、現時の如く國民の欲望複雑となれる時代には、衣食足らざる場合、又その欲求と之が充足との間、大懸隔ある場合、人は満足し得ざるべきを以て、國家は萬民をして、生活に困らしめざるの基礎を授くべきなり、その昔し「若貧窮身、無可布施財、見他布施時、可生隨喜心」(童子教)と教へたるが如きは、物質上の困難に苦しめらるゝこと餘りに甚しく、又宗教に羈絆せらるゝこと薄らげる、今日の俗衆に對しては不適切なり、現時の國民經濟にありては、寧ろ右生存上の必要なる基本以上に一步を進め、人の高尚なる生存目的に關し、その時その處に勢力ある見解と、苟くも牴觸することなき限り、盡し又盡すの要ある固有職分あり、そは外面開化を向上發展せしむるにあり、その組成員全部の欲望を、經濟貨物により出來るだけ完全に充たし、その間現存欲望を充たすのみならず、新欲望の開發生活標準の遞昇をも圖ると共に、人口遞増の勢を續くることを期するにあり。事實上現時の國民經濟にありては、二種零落の一つ又は兩者共に、衆庶の經濟的地位に伴ふことあり、即ちかゝる零落は或は絶對的たり、或は相對的たり、絶

對的零落とは、他人の經濟的地位又は新時代の變り來れる諸欲求への比照を待たず、境遇そのものとして赤貧なるを意味す、現今一般に絶對的零落は例外なり、而も尙普通に想像せらるゝが如き程度により、珍しとすべきことなし、諸文明國に於ける固定資本特に機械の改良に基づき、勞働及資本の入替を伴ふべき諸變動、景氣の劇變により生産の緊縮儲け口の縮少を來すべき大變動は、多數の人々を害し、就中その多數は従前の如き地位により、復職することなし、その經濟的禍害にして相當に大なるものならんには、さ乍ら噴水のご想はるゝが如き仕方により、禍害それ自體を膨大せしむるの傾向あり、換言すれば子供等は教育されず、身體上、社會上及道德上一層低き生活標準への逆轉あり、その諸方面への進歩は止む、相對的零落は一層普通なり、こは民衆中大部分が一面には一般經濟進歩富の増殖、他面にはその合理的欲望及抱負の啓發と、步調を合せて進まざることを意味す、此點につき富者特に成上り者の、濫費により刺戟されたる、單純奢侈への、渴望は、之を問ふ迄もなし、吾人が茲に考へつゝあるものは、民衆の高尙なる欲求にあり、是等の欲求にして正しき方向に進みつゝありとせば、そは文明の一條件なるを以て、寧ろ歡迎なるべきなり、文明の發達に於ける引續く各階級は、新欲望により伴はる、是等新欲望開發さるゝに非ずんば、文明は停滞するに至るべし、尤もかく欲望の増進を是認すべき經濟學說と、節制の徳を説くこと多き倫理學說との衝突又は調和につきては、簡單に説き去るを得ず、こは別項

に於て問題とさるべき所なり。^{o*}

茲に併せて注意すべきは、貨物に相當せる獨逸語 *Gut* の意義なり、即ち *Grundel* が同語につき説ける所は、恰も經濟學の基本概念に關聯すると共に、經濟と倫理との特異及關聯を考ふる上に、裨益すべきものあるを以て、その論旨中議論を挿むべきものなしとせざるが如きも、以下その儘紹介せんか、「善き」^{イット}との形容詞は一物體が何れかの生物の福祉のため、進歩的なる一關係を全く一般的に言明す、之につきても他の一生物との關係に於て、説かるゝ場合なればとて、最終目的としての人の福祉は、常に含意せらるゝや素よりなり、かくて「善き」この語を何等の附言なくして用ゐるか、直接に人の福祉を想ふべし、假令は食事又は天氣よしと言ふ場合は然り、されど一飼料が一家畜のためによしと言ひ、又は一肥料が作物のためによしと言ふ場合は、右附言あるがために直接には動物界又は植物界の、一本體との福祉關係を指示するも、そはこの動物又はこの作物そのものが、更に人間の福祉目的に資すべしとの、條件の下に於てのみ然り、蓋し人は野獸又は雜草のために有益なるものを、眞面目によしと呼ぶを欲せざるべきを以てなり、無機界の諸部分につき同語を用うるときは、言葉の短縮あること一層著し、蓋し一の研ぎ物道具又は保存方便が、鐵のためによしとせらるゝは、ために人のために役立つべき場合に限るや明かなり、蓋し無機界の一部としての鐵は、材料及力の機械的一結合を、代表するに過ぎず、定れる不變の

* Cf. Ely, op. cit., pp. 59, 60.

** Cf. Gruntzel, op. cit., SS. 37-39.

自然法により律せらるゝのみにして、その他の變化を示すことなければなり、生物としての動植物及人は、有機的結合たり、素より又自然の材料及力より成るのみなるも、その形を變らしむべき結果、その結合を觀念上固有の一發展法則の下に總括し得べく、かくて又機械的生現の因果態以外に、尙有機的生現の特別一因果態に律せらる。

實名詞 *Genie* を始めて使用するに至りしは、倫理學なり、而も通常熟語最高善 *Höchstes Gut* の形にて然り、而して同語の下に外面的、詳言すれば官能の知覺により、確認し得べき物體を解したり、されどその物體は全外界を、人間福祉の目的に資せしむべきものたるざるは自明なり、それは不可能なればなり、寧ろそは人そのものをその性格上改善せしむべきものたり、かくてその人の自己改善により、その一般福祉進められたるを想ふべきものたり、倫理學の最高善は、最大可能の自己完成なり、従ひてそは素より當該倫理の方針を生み出せる、共同體異なるに従ひ、相違を呈すべき一理想なり、即ち各倫理の方針は人々が尋常狀態の下、孤獨に生存せずして、一共同體内に住むの事實を、顧慮するの要あり、従ひてその理想にはその共同體により、その組成員に對し課せられたる諸要求に、相應せる一切の特質を備ふるの要あり、最古の宗教より湧ける倫理にありては、右の共同體は家族たり、希臘の哲學にありては國家たり、基督教の觀念にありてはそは人間界たり、輓近生活にありては諸共同體中大なるもの、一つたり、而して他の共同體を全く

無視するが如きことなし、その理想中には自己の福祉のためにも亦努むべき、一人の模範例描き出さる、唯かく自己の福祉に心掛くも、直接に然りとせずして間接に然り、即ち結局は個々の人々よりも、一層高位におかるべき、一共同體を介して然り、故に「生命はあらゆる寶中の寶」に非ずと謂ふべし、寶とすべきは共同體の首領の、命令に合致すべき凡てのものたり、その命令が共同體のために進歩的なりとせらるゝ、限度に於ては然り、之と共に性格そのものが判斷せらるゝや、外面的誘引の影響を受け、その性格より生み出さるゝ行爲が判斷せらるゝやにより、主格的意義の善と、物格的意義の善と區別され得べし、かくて一人の淪らざる性格資質が、その所屬の共同體に良く適合する際に、善き公民、善人等と呼ぶる、又一行爲假令ば生命を賭して一人を救ふは善なり、蓋しそは共同體に益する所あればなり、その行ひありし人の性格上、非難なしとせず、従ひて假令ば利欲の念に驅られたるものなる際にも然りとす。

經濟上善なる語の意義に關する考察は、全く異なる結論を得せしむ、素より此場合に於ても亦人の福祉に對する關係上判斷せらるゝも、倫理の場合には、それ自體が既に人間福祉のために存置さるゝとすべき一共同體と、人との關係に關す、之に反し經濟上にありては直接に外面の一物體と、人間の福祉目的との關係に關す、従ひて倫理にありては、善なるは人なり、經濟上にありては外物なり、倫理上よりせんか、善は屢々使用さるゝ一對句としての不良、又は主格的意義によ

り性格判斷上使用さるべき惡を伴ふも、經濟上よりせんか之に反し、善物ありと説き得べきのみ、蓋し資質及其の影響につき判斷さるゝことなく、當然よしとせらるゝ一物にのみ向けらるべき、努力につき判斷さるればなり、倫理上にありては出發點に着眼す、從ひて言ひてふ語は多くは形容詞として使用せらるゝも、經濟上にありては寧ろ目標點に着眼す、從ひて頻繁に名詞として使用し、貨物につき説くことゝす、倫理上よりせんか經濟貨物は、そのものとしては元來善惡に無頓着なり、蓋し各貨物につき善用も惡用もなされ得べく、倫理の標句が貨物に加へらるゝは、その貨物により性格の一特定發展傾向が、助長せらるゝ程度に限らるればなり、特に金錢に特殊の一不道德性が押しつけらるゝは、之がために現存せる共同體の、分裂を容易ならしめ、從ひて共同體により不良と刻印され易きを以てなり。(未完)